

埼玉県特別支援教育研究会高等学校分科会シンポジウム

「特別な教育ニーズのある生徒に、高等学校はどのような支援ができるか」

企画者提起 星美学園短期大学客員研究員 服部純一

タイトル名 青年期・成人期の生き方を創る高等学校段階での特別な教育支援を考える

1. シンポジウムの設定について

2007年の学校教育法の改正で、それまでの障害のある児童生徒に対する「特殊教育(Special Education)」から、全ての幼児・児童・生徒の特別な教育ニーズに対する教育を「特別支援教育(Special Needs Education)」に変化して15年が経過した。小中学校では授業のユニバーサルデザイン化の研究など、教員の意識の上での変化は見られてきている一方、「1年生問題」や小中学校の通常学級での特別な教育支援に対する理解や意識に関しては、未だに十分に進んでいるとは言えない状況である。

一方で、中学生の不登校生徒の多くの割合で発達障害傾向の生徒が含まれているとか、高校での中途退学生徒が少なくない背景に、発達障害や学習成績を中心とした進路指導や生徒の興味関心と高校の教育課程の不適合の指摘がある。こうした状況の中で、中学校や高等学校においても、個々の特性や教育ニーズに合わせた支援法を見出す必要があると思われる。また、特別支援学校高等部への期待が高まり、新たな高等学校内への支援学校高等部分校の新設が増える一方で、高校への進学を希望する特別支援学級の児童生徒とその保護者が、高校進学のために十分な特別支援学級での指導目標が達成されていない段階で、無理に通常学級に転籍を求めるケースも少なくない。

こうした状況を高等学校の側だけでなく、進路指導で関わる中学校の教員や将来の社会自立に向けたキャリア支援を担う小学校特別支援学級の教員などがこの分科会に参加し、中学生・高校生段階の支援を必要とする生徒の生き方を創る高等学校段階での特別な教育支援を考える機会としたい。

2. シンポジウムでの話題と方向性

今回のシンポジウムでは、話題提供者として埼玉県立浦和工業高等学校の森先生から、県立高校の生徒への特別な教育支援の課題と工夫を、埼玉県立上尾特別支援学校上尾南分校教頭の菅原先生から、今年開設され今後3年間で9校の県立高校内分校を開設することの目的や意義、特徴を通して、特別支援学校高等部の教育支援の方向性を示していただく。次に、2つの通信制全日型高校である、クラーク記念国際高等学校さいたまキャンパスの谷山先生、同校内に設置された大志学園(小中学生の教育支援機関)の須藤先生と、明蓬館高校の理事吉田先生と同校 CONEC 副センター長の村上先生からお話を伺う。両校とも通信制全日型高校のメリットを生かして、個々の生徒の特別な教育支援により中学生時代に不登校や発達障害からの問題を抱えていた生徒が、自らの生き方を創り上げて行った実践と成果がある。しかしその迫り方や支援法にはそれぞれに特徴がある。

一つ一つの実践や学校の特徴の報告から、中学校・高等学校教育の中での個々の教育ニーズに対する特別な教育支援の現状での課題や今後の可能性について、埼玉大学教育学部教授の安藤先生に、指定討論をいただき、中学校・高等学校における特別な教育支援について論点を整理したい。その上でフロアーやオンライン参加の皆さんから、話題提供者への質問と共にご意見をいただき、全員で特別な教育ニーズのある生徒に、高等学校はどのような支援ができるかという課題に迫りたい。